



高木クノさん(大倉)



ちょうど今の季節なら山へ行って堆肥にする「木の葉さらい」。あと山で炭焼きをすれば、萱を干したもので「しご」（炭俵のようなもの）を作って炭を運んだりしたことを覚えています。自然にあるものは何でもうまく使っていましたね。

あと、ダムができる前のことですかね。1町3反部ぐらいの農地があったと思います。機械がないので、農作業は全部手作業。その中で息づいていたのが、今でも使いますが「結い」というつながり。田植え、稲刈り、麦の種まきなど、組の人みんなで今日はあの家、明日はあの家というように。

手伝ってもらえば「結いをなさねえど」と言うわけです。田の草取りなどは、1週間から10日ぐらいあっちこちでみんなでズラーと並んで這って歩いてましたね（笑）。

当時はあてにできるのが「人力」であり、「人間」しかなかったから、「までい」に付き合っただけでしょうね。

あいの沢にすてきな音を

ライオンスクラブからオルゴール寄付

いいたてライオンズクラブ（菅野敬会長）が25周年を迎えたことから、その記念事業として同会から村に50万円相当のオルゴール1式が寄付され、この度あいの沢に設置されました。

このオルゴールはスピーカーを通してメロディを奏でる仕組みのもので、スピーカーは自然体験学

習館とあいの浮き橋のきこり寄りの2箇所に設置されました。

現在のところ、まだメロディは決まっていませんが、このオルゴールは自由に曲、時間が設定できるため、今後村でメロディを選曲し、音楽を流す時間帯を決定する方針です。



▲設置されたスピーカーと菅野敬会長（中央）

